

価値形態論における「本質の同等性」について

望 月 俊 昭

一 はじめに

マルクスの「価値形態」論の何たるかを見定めるためには「価値物」・「価値体」の区別が不可欠である。⁽¹⁾ 両規定がどのように関連し、「価値形態」論の展開においていかなる意義をもつかという点については拙稿〔註(1)〕で簡単に方向づけをしておいた。この点に関する立ち入った考察は次回試みるとして、本稿では、「本質の同等性」論が「価値形態」論においていかなる意味をもつかを検討しておく。⁽²⁾

『資本論』⁽³⁾ 第一巻第一章第三節については、第一節における分析の成果である価値としての「同質性(同等性)」が「前提」されている、もしくは、はじめにそれが「設定」されると屢々指摘される。また、第三節における叙述を一瞥すると第一節における「同等性」論が第三節の冒頭で繰り返されているかの印象を受ける。しかし、「価値形態」論を展開するにあたってマルクスがそれを「前提」もしくは「設定」したと見るのは皮相である。

価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同等性」について

また、単なる繰り返しというわけでもない。「同等性」論ははかならぬ第三節のなかに、第三節の独自の論点とのかかわりにおいて登場したものである。本稿は、「本質の同等性」論をいわゆる労働価値論との関連においてでなく「通約可能性」論との関連において考察する。そのためにまず、当該事柄に論及している著作を二、三取り上げて問題の所在を明らかにし、次にマルクスのアリストテレス論を再検討し、さらにマルクスのペイリー論を本稿の課題とのかかわりにおいて検討する。これらの作業を通して「本質の同等性」論が「価値形態」論のなかにいかなる位置を占めているかを確認し、その諸論点の出発点たる論点(一)〔註(2)参照〕の位置づけをおこなって次の研究の準備としたい。

(1) 拙稿『『価値形態』に関する一考察——等価物の『価値体』としての規定について——〕(成城大学『経済研究』、第六十七号)参照。久留間鮫造氏は『貨幣論』(大月書店、昭和五四年)のなかで、氏の「回り道」論のキーワードである「価値物」がマルクスの言葉では「価値体」であったと訂正を発表されたが、その際、それが用語上の単なる「ミス」の訂正であつて氏の「回り道」論の筋道に変化は生じないとされている。同様の見解は山本広太郎氏によつて既に提出されていたこともあつて、訂正に関する久留間氏の説明も、ある程度予想された内容のものであつた。ところが、訂正の発表後いちはやく富塚良三氏によつて反論が提出された。久留間氏による「今回の訂正こそが『大変なミス』」(富塚良三、「価値表現の『回り道』の論理と交換過程の矛盾——久留間鮫造著『貨幣論』によつて——」、『講座・資本論の研究』、第二巻、(1)、青木書店、昭和五〇年、三三四頁)であり「『価値物』の概念を訂正する必要はない、いな、『価値物』の概念をその独自性において把握しえなければ、価値形態論の肝心要の点が見失われることになるであらう」(同、三二七頁)という見解がそれである。この見解は、訂正前の「回り道」論を支持し、久留間氏の用語法に対する批判にはじめて真向から反批判を加えている。訂正に関する両氏の見解に

つては、昨秋の経済学史学会（第四四回全国大会）での報告を次回まとめる予定である。同学会開催直前に発表された山内清氏の論文「価値表現の『回り道』について——『価値物 Wertding』の意義——」（東京大学『経済学研究』、第二三号）によっても示されているとおり、「価値物」・「価値体」の無批判的な同一視はもはや過去の時代のものとなったといえる。

(2) 「二〇エレのリンネル＝上着の上着」という等式のなかでは、

論点(一) 上着はリンネルと質的に等しいもの、同じ性質の物として意義をもつ。

論点(二) 上着は価値物として意義をもつ。

論点(三) 上着は価値体として意義をもつ。

論点(四) 上着の身体、使用価値はリンネルの価値を表現する（上着の現物形態はリンネルの価値形態になる）（前掲拙稿、一一九頁）。「相対的価値形態の内実」に関するマルクスの叙述は、等式から出発し論点(四)に到達するという形をとっている。本稿で取り扱うのは、等式から論点(一)つまり「同等性」関係までの範囲である。

(3) マルクスの著作からの引用には以下の略号を用いる。なお他の著作も含めて訳文には随時原文を挿入し必要に応じて訳を変えている。——Gr./Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Berlin 1953; 1974. 高木幸

二郎監訳『経済学批判要綱』、大月書店、昭和三三—四〇年。Kr./Zur Kritik der politischen Ökonomie,

In: Karl Marx - Friedrich Engels - Werke (以下 Werke と略記), Bd. 13, Berlin 1975. 大内兵衛・細川

嘉六監訳『マルクス・エンゲルス全集』、第一三巻、大月書店、昭和三九年（引用は第一八刷から）。Mw. III./

Theorien über den Mehrwert, In: Werke, Bd. 26-3, Berlin 1974. 同『全集』、第二六卷第三分冊、昭和四

五年（引用は第八刷から）。『初版』Ka. I./Das Kapital, Bd. 1, Hamburg 1867: rpt. Tokyo 1959. 岡崎次

郎訳『資本論第一巻初版』、国民文庫、昭和五二年。Ka. I./Das Kapital, Bd. 1, In: Werke, Bd. 23. マ

価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同等性」について

クス・エンゲルス全集刊行委員会訳、『資本論』第一巻第一分冊、大月書店、昭和四三年。Ka. II. / *Das Kapital*, Bd. 2, In: Werke, Bd. 24. 同『資本論』第二巻。Ka. III. / *Das Kapital*, Bd. 3, In: Werke, Bd. 25. 同『資本論』第三巻第一―二分冊。Ms. I. / *Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861—1863)*, Teil 1, In: Karl Marx - Friedrich Engels - Gesamtausgabe, Abt. 2, Bd. 3, Teil 1, Berlin 1976. 資本論草稿集翻訳委員会訳、『資本論草稿集』④、大月書店、昭和五三年。

二 問題の所在

本稿が考察の中心に据えるのは第三節の次の一節である。

これらの感覚的に違った諸物は、このような本質の同等性なしには、通約可能な大いさとして互いに関係することはできないであろう……。 (Ka. I, S. 73, 八〇頁)

「本質の同等性 *Wesensgleichheit*」なる術語は「共通な社会的実体」(S. 52, 五二頁)が論じられている第一節ではなく第三節の「価値形態」論にはじめて登場する。しかも、もしあたってはこの「実体」とのかかわりにおいてなく「通約可能性 *Kommensurabilität*」との関連で論じらるゝ。 x 量の商品 $A = y$ 量の商品 B という等式について第一節では「同じ大いさの共通なもの *ein Gemeinsames von derselben Größe*」が二つの違った物のうちに……存在する」ということから、両方とも「それ自体としては *an und für sich*」その一方でも

他方でもない或る一つの第三のものを einem Dritten に等しい」(S. 51, 五〇頁)とされていたにすぎない。そのかぎりでは「本質の同等性」という視点はそこにはない。しかし、諸商品が「貨幣によって通約可能になるのではない」(S. 109, 一二五頁)とするマルクスにとっては、「本質の同等性」と「通約可能性」とは不可分の関係にある。そして、その関連は第三節の「価値形態」論のなかではじめて論じられるのである。ここで、この点に関してマルクスの見解と好対照をなしている二、三の見解を簡単にしておく。

はじめにベームーバーヴェルクであるが、彼は、ある意味ではマルクスと同じ土俵に立ってマルクス批判を展開しているといえる。彼は『マルクス体系の終結』⁽⁴⁾のなかで次のようにいう。

ある定まっている科学上の目的のために、ある方向や他の方向において物が示すさまざまな相違を捨象するということ、そして、これらの物をたんに唯一の属性——この属性はこれらの物に共通なのであってしかもこの属性の共通性 deren Gemeinsamkeit が比較可能性や通約可能性 Kommensurabilität などのための土台をあたえるのである——だけにしたがって考察するということは、それじたいとしては、たしかにゆるさるべきことである。(S. 422, 一七九—一八〇頁)

周知のとおり、ベームーバーヴェルクによるマルクス批判は、この「共通性」が労働にのみあるわけではないという方向でなされる。そのかぎりでは、等置されるA、B両者の共通な属性は何かという観点そのものは批判の対象とされない。マルクスが「共通なもの」を求める手順そのものは「すこし奇異ではあるが、しかしそれ自

価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同等性」について

身は排斥されるべきものではない」(S. 384, 一一九頁)のである。そして、「交換における真の『共通なもの』
das wahre „Gemeinsame“ im Austausch は、……マルクスによってなされたのとは別の方向において求めら
れるべきである」(S. 429, 一八九頁)ということになる。交換される諸物が「価値であるかぎり……つねに同じ
質のいろいろな量 quantities of the same quality」であり「困難は、この質を見いだすことである」(Mw. III.
S. 161, 二〇九頁)というマルクスの見解は、以上のような意味において、ベームーバーヴェルクの共有するところ
であったといえる。彼の「属性の共通性」が「通約可能性」に土台を与えるという論点は、マルクスの「本質
の同等性」と「通約可能性」との問題に対応したものであったといえよう。⁽⁵⁾

ベームーバーヴェルクの見解は等置された二つの商品の「共通性」を否定するものではない。これに対し、ゲ
オルク・ジンメルは『貨幣の哲学』(分析篇)⁽⁶⁾のなかで二つの事物の関係を次のように論じている。

異なつた諸客体の定量が比較されうるのは、ただそれらが同一の質をもっている sie von einer und der-
selben Qualität ときだけであるといふのは、もちろん正しい。したがって、測定がただ二つの定量の直接的な
比較によつてのみ行なわれうる場合、それは両者の等質性 Qualitätsgleichheit を前提するのである。ところが、
それぞれ二つの定量の変化、差異もしくは関係が測定されることになっている場合には、測定する実体の
あいだの比例が測定される実体のあいだの比例のうちに反映することによつてこの後者の比例が完全に規定さ
れるというだけで十分であつて、実体そのもののあいだになんらかの本質的同等性が存在する zwischen den
Substanzen selbst irgendeine Wesensgleichheit... bestehen 必要はない。したがつて、等置されうるのは、

質的に異なった二つの事物ではなくて、それぞれ質的に異なった二つの事物のあいだの二つの比例なのである。(S. 103, 一五八頁)

ジンメルによれば、一方の要素の定量と他方の要素の定量とのあいだに一つの定数的關係が成立したとしても、「しかし、だからといって、両者のあいだになんらかの質的關係もしくは同等性 *irgendeine qualitative Beziehung oder Gleichheit* が存在する必要はない」(S. 103, 一五七—一五八頁)ということになる。ジンメルにとって「同等性(同質性)」は二つの事物のあいだにあるのではない。「同等性」をもたない両者は第三者を介して比較考量される。二つの大いさの量的關係が「それぞれの大きさをそれぞれ他の大きさと關係させ、この二つの關係が相互に等しいとか等しくないということに基づいて」(S. 120, 一八二頁)確定される。直接的な比較でないこのような相互關係の比較考量こそ「人類がなしとげたもつとも偉大な進歩の一つ」(ebenda, 同上)である。貨幣の意義も、ジンメルによれば、「他の諸客体の相互關係を表現する」(S. 122, 一八四頁)ことにあり、貨幣がそれをなしているのは「諸事物そのものが同等性や類似性をもっていない場合でも諸事物の諸關係を等置することができるという、發達した精神がもつあの能力のおかげ」(ebenda, 同上)ということになる。

もしある個別的な商品が或る貨幣価値と直接的に等置されなければならないとすれば、商品とその尺度とはその本質を同じくしなければならない *die Ware und ihr Maßstab gleichen Wesens sein müssen* というのは正当な要求であるだろう。しかしながら、交換と価値規定ということだけを目的とするときには、さまざま

価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同等性」について

まな……商品の相互関係……が決定され、そしてこれに貨幣額、すなわち作用している貨幣在高のうちのこれに相等する部分が等置されさえすればよい。そしてこのためには、数的に規定されうる大いさのみが必要とされるにすぎない。(S. 105—106, 一六一—一六二頁)

こうして、商品と貨幣とのあいだには「質的に同じ性質をもった諸事物でのような共通の尺度は存在しない」(S. 109, 一六六頁)のであり「本質的同等性」も存在しないことになるのである。⁽⁷⁾

以上のようなジンメルの見解については、次の論点に留意しておくべきである。第一に、二つの事物の直接的な比較には両者の「同等性」が前提されるが、そのような「同等性」をもたない二者が第三者を介した相互関係によって比較考量されることこそ重要なのだという点、第二に、貨幣の意義もこの点にあり、「同等性」をもたない二者がこの第三者たる貨幣によって比較考量され通約可能になるという点、この二点である。

宇野弘蔵氏は『経済学方法論』⁽⁸⁾においてマルクスを批判しつつ次のようにいう。

小麦と鉄との等式の内に直ちに両者に「共通なもの」を求めるのは、商品交換のこの特性を無視することになる。事実、この両者に「共通なもの」としてあらわれるのは直接に価値ではなくて、貨幣価格にほかならない。(一七四頁——強調は引用者)

同じ大いさの「一つの共通なものが、二つの違った物のうちに……存在する」(Ka. I. S. 51, 五〇頁——強調は

引用者)とするマルクスに対し、『著作集』第三卷⁽⁹⁾のなかで宇野氏は、両者に「共通なもの」として「ただちに……現われる」(二三五頁)のは貨幣価格であると指摘する。また、諸商品が「人間労働という同じ社会的な一つの^{ソベイト}の諸表現である」(Ka. I. S. 62, 六四頁)というマルクスに対し、次のように論評する。

諸商品が、貨幣形態をもつて示すその同質性は、いうまでもなく互に交換されうるものであるということにほかならないが、それは物が自然的に有する重さというような同質性と異って、その同質性にもとづいて比較せられ、交換せられるというのではなく、交換関係を通して比較計量せられつつ要請せられ、確立されるという、いわば社会的に形成せられる同質性である。(前掲『経済学方法論』、一八六頁)

等置される二商品のそれぞれのうちに「共通なもの」が存在し、その意味において両者とも「それ自体としては an und für sich……或るひとつの第三のもの einem Dritten」(Ka. I. S. 51, 五〇頁)に等しいとするマルクスに対し、宇野氏は「交換によって形態的に要請される『等一性』(同、一九〇頁)という側面を強調し、この「第三者」を価値表現が「そのまま示す」(前掲『著作集』、三二三頁)か否か、「そのまま把握しうる」(同前)か否か、共通な第三者として「ただちに……現われる」か否かと問い質し、示さない、把握しうるものではない、現われないという形でマルクスを批判するのである。同様に、すべての商品が価値としては対象化された人間労働であり、したがって「それら自体として通約可能である……」(Ka. I. S. 109, 一二五頁——強調は引用者)というマルクスに対し、『マルクス経済学原理論の研究』⁽¹⁰⁾のなかで宇野氏は「諸商品は、そのまま、『通約』しうる

価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同等性」について

ものとなる、ともいえない」(五〇頁——同前)とし、「これでは貨幣によるいわば外部からの『通約』の要請……(という点——引用者)が不明確になる」(同前)と批判する。つまり宇野氏の立場からすれば、諸商品がそれ自体としてどのようなものであるかという立論そのものに問題があるということである。「共通なもの」も「通約可能性」もマルクスとは異なる観点から——形態的に要請され、社会的に形成されるものとして——位置づけるべきだとしたのが宇野氏の所説である⁽¹¹⁾。

最後に、柄谷行人氏の見解を取り上げる。氏は『現代思想』に連載された論稿「貨幣の形而上学」⁽¹²⁾のなかでマルクスの「形而上学」を以下のように批判する。

マルクスは、現象とはことなる本質をみいだすことが科学だという。だが、科学における「本質」とは、「より高い説明価値をもった」仮設モデルにはかならないのであって、「本質」が「現象」の背後に、または内側に隠れているわけではない。(『現代思想』、第六巻第二号、五六頁)

氏によれば、本質と現象、表層と深層、外部と内部等の二分法そのものが「派生的なもの」(同前)であり、「本質あるいは概念といった超越論的なもの」は「転倒にかならない」(第五巻第一二号、三四頁)。氏はさらに次のように説く。

マルクスの「本質と現象」の二分法、あるいはものごとの「内部」に本質がかくされているという考えは、

ヘーゲルの思考の残滓であると、ルイ・アルチュセールはいつている……。しかし、われわれが「価値形態論」において検討してきたのは、たんに商品の本質的価値という考えがヘーゲルのなものだということではなく、一般に「本質」なるものこそ、「価値形態」の消去によって存する形而上学だということである。（第五巻第一三号、二九頁）

「マルクスをマルクスたらしめている」（同第一二号、三一頁）「価値形態」論によって解体されるべき「貨幣の形而上学」とは、氏によれば、「一商品に本質的な内在的な価値があるという考え」（同第一三号、二九頁）である。「本質としての価値」（同前）、「内在的・超越論的な価値」（同第一号、六七頁）といった「貨幣の形而上学」にマルクス自身「とらわれている」（同第二二号、三五頁）のは、彼が「労働の同一性」、「質的同一性」、「共通の本質」を「先験的に前提」（第六巻第二号、四五頁）しているからであって、その意味で従来のすべての貨幣論と同様「論点先取」（同第一号、三六頁）の誤りをおかしている。そのため、「共通の本質」、「質的同一性」を「可能にする貨幣あるいは貨幣形態の『起源』」（第五巻第一二号、三一頁）、「『本質』そのものの貨幣的起源」（同前）を問う作業がマルクスの「価値形態」論に依拠しつつ行われなければならない。その場合、「価値形態」論が「貨幣の形而上学」批判となりうるのは、氏によれば、それが「同一性」論（「共通の本質」論）のあとからはじまっているからであり、「そこには『等価』も『共通の本質』も」（第五巻第一二号、三一頁）ないからである。すなわち、「価値形態」論が「本質の同等性」論を排除しているからである。この点を氏は『マルクスその可能性の中心』⁽¹³⁾のなかで次のようにいう。

価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同等性」について

彼は等価の秘密を諸商品の「同一性」に還元する。しかし、そのような同一性は貨幣によって出現するのだ。貨幣形態こそ、価値形態をおおいかくす。したがって、貨幣形態の起源を問うとき、マルクスは、もはや「等価」や「共通の本質」という考えを切りすてている。(二七頁)

マルクスの「価値形態」論が「本質の同等性」論を排除しているとする氏の見解は、本稿の示すとおり事実にもとづくものとはいえない。しかし、「本質の同等性」が貨幣によって出現するところの「転倒」であり解体されるべき「形而上学」であって、「価値形態」論によってのみその解体が可能なのだという氏の見解は、従来とは異なった新しい立場を示すものといえる。⁽¹⁴⁾

以上見てきたように、直接名をあげて言及していないジンメルも含めて、マルクスの「本質の同等性」論に関しては何を第一義的に考えるかによってそれぞれが立場を異にしていた。その各々を比較検討することは本稿の課題ではない。「本質の同等性」をもたない二つの商品が第三者たる貨幣を介した相互関係によって比較考量されることに意義があるとする見解、また、この「同等性」が形態的に要請され社会的に形成されるという点を強調する見解、さらに、それが「価値形態」論によって解体されるべき形而上学であるとする見解等、これらの見解の前においてマルクスの「本質の同等性」論はどのようなものか、そしてそれが「価値形態」論のなかにどのような位置を占めているのか——これを見ていかなければならない。

(4) Eugen von Böhm-Bawerk, *Zum Abschluß des Marx'schen Systems*, In: Eugen von Böhm-Bawerks kleinere Abhandlungen über Kapital und Zins (Die gesammelte Schriften, Bd. 2), Wien und Leipzig

1926. 木本幸造訳、『マルクス体系の終結』、未来社、昭和五四年。

- (5) 交換される諸物の「同等性 Gleichheit」という点には批判が集中する。マルクスの「同等性」論はベームバーヴェルクにとって『「おなじ、大いさの共通物」の現存』(S. 420, 一七五頁)の推論を意味し、「交換されるべき諸価値の『等価』 „Äquivalenz“ という古いスカラー神学的な観念」(S. 383, 一一八頁)としてとらえられているからである。そのため「一方で「共通な属性」を問題にしながら、他方で「同等性」という言葉を用いて次のように論じているのである。すなわち、交換によって諸商品がそれらの所有者をかえる事態は「なんらかの不同等性 irgendeine Ungleichheit」や……不均衡」(S. 383, 一一七頁)がはたらいたことによるのであって、「同等性と精確な均衡」(ebenda, 同前)とが支配しているところでは、それまでの安定状態に変化はおきかない、と主張するのである。
- 「同等性」と「等価性」とのこのような結びつきは、カール・メンガーの場合、より明確な形をとっていた。

……價格は全過程のうち感覺的に知覚し得る唯一の現象であり、その高さは精密に測定せられ、且つ日常生活は我々をして間斷なく之「價格」に注目せしめるから、この價格の大きさをば交換の本質的なもの das Wesentliche と見做す誤謬が、更にこの誤謬の歸結として交換に於て顯現する諸財量を等價者 (Äquivalente) と見做す誤謬が、ともすれば生じたのである。けれどもこのために我々の科學にとつて計り知るべからざる不利益がもたらされるに至つた、即ち、研究者は價格現象の領域に於て二つの財量間の見せかけの相等性 (angebliche Gleichheit) をその原因にまで還元するといふ問題の解決に没頭し、或る者はこの原因を之等の財の上に投下せられた相等的い労働量に、他の者は之を相等的い生産費に求め、その上、諸財はそれが等價者なるが故に相互に手交されるのか、それとも交換に於て相互に手交されるが故に等價なのかといふことについて論争が起つたのである。しかるに二つの財量の価値のかゝる相等性 (客觀的意味に於ける相等性 eine Gleichheit im objektiven Sinne) は實際は何處にも存在するものではない。(Carl Menger, *Grundsätze der Volkswirtschaft* 価値形態論における「本質の同等性」について)

価値形態論における「本質の同索性」について

schaftslehre, In: Carl Menger gesammelte Werke, Bd. 1, 2 Aufl., Tübingen 1968, S. 172—174. 安井琢

磨譯、『國民經濟學原理』、日本評論社、昭和十二年（一九一七—一九二二頁）

メンガーにとっては「価値は、自己の支配下にある財が自己の生命及び福祉の維持に對して有する意義に關し經濟人の下す判斷（Urtheil）であり、從つて經濟人の意識の外には存在しない」（S. 86, 八〇頁）のであつて、しかも「客觀的に存立するもの das, was objektiv besteht は、既に物か物の數量」（ebenda, 同前）とすべきなのであるから、価値のこのような主觀的性格と交換の性質を理解すれば「客觀的意味における相等性」（S. 174, 一七二頁）、「言葉の客觀的意味に於ける等價者」（S. 175, 一七三頁）は「事柄の性質上全く問題とならず、現實に於ては決して存立し得ざるものが判る」（ebenda, 同前）と云ふことになるのである。

(6) Georg Simmel, *Philosophie des Geldes*, vierte unveränderte Aufl., München und Leipzig 1920: 1922.

元浜清海・居安正・向井守訳、『貨幣の哲学』、分析篇、白水社、昭和五六年。

(7) シンメルはこの点に關し次のような修正論を展開する。すなわち、經濟的技術のある種の不完全さは經濟的行為を規定する比例の不正確さをもたらし、そのため測定される物と測定する尺度との「本質的同索性 eine Wesensgleichheit」すなわち価値そのものと価値尺度との「ある種の質的同一性 einer gewissen qualitativen Einheit」（S. 137, 一一〇五頁）が必要とされる」と。しかし彼は、このようなことは「貨幣の本質に由来する内的理由に基づくものではない」（S. 136, 一一〇四頁）としている。

(8) 宇野弘蔵、『經濟學方法論』、東京大学出版会、昭和三十七年——引用は第一〇刷から。

(9) 同、『宇野弘蔵著作集』、第三卷、岩波書店、昭和四八年。

(10) 同、『マルクス經濟學原理論の研究』、岩波書店、昭和三四年——引用は第七刷から。

(11) マルクスの叙述に対する宇野氏の批評は同じ術語を用いてマルクスの含意とは異なることを別の角度から指摘する

という形でなされるため、個々の論点を直接比較してもほとんど意味がない。両者の方法の相違に関する検討は他日を期し、本稿では視角の異なる点を確認して先へ進むことにする。

(12) 柄谷行人、「貨幣の形而上学」上、二一四、完（『現代思想』、第五卷第一一一三号、第六卷一一二号）。

(13) 同、『マルクスその可能性の中心』、講談社、昭和五三年——引用は第五刷から。

(14) 柄谷氏の「価値形態論には通俗のマルクス理解を克服する大きな意義がある」（栗本慎一郎、『幻想としての経済』、青土社、昭和五五年、二九七頁）とする栗本氏の一連の貨幣論、また、マルクスの「価値形態」論への論評を随所に含む吉沢英成氏の『貨幣と象徴』（日本経済新聞社、昭和五六年）等は、柄谷氏の所説も含め、マルクスの「価値形態」論を取り扱う仕方としては一つの新しい傾向を示している。吉沢氏の「そのロジックは結局貨幣の原型を前提することでは成り立たない」（一五四頁）という「価値形態」論批判および柄谷氏の「価値形態」論理解については次回検討する。

三 マルクスのアリストテレス論

マルクスによれば「価値形態を……はじめて分析したかの偉大な探究者」（Ka. I. S. 73, 七九頁）アリストテレスの天才は、彼が諸商品の価値表現のうちに「ひとつの同等性関係を発見している」（S. 74, 八一頁）ことのうちに光り輝いている。マルクスのこのような評価に接すると、「本質の同等性」はアリストテレス以来の動かしがたい論点であるかのような印象を受け、また少なくとも「同等性」論に関する両者の緊密な関係は疑う余地がないかのごとくである⁽¹⁵⁾。しかし、「通約可能性」論と「本質の同等性」論との関連を見るかぎり、マルクスの叙述から受ける印象ほどの近親性はないのではないかと思われる。「価値形態」論に登場するアリストテレスは、た

価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同等性」について

単にマルクスの眼を通したアリストテレスという以上にマルクスのである。ここでアリストテレスに帰れというのではないが、マルクスがどのようにアリストテレスを読み込んでいるかを検討することによって、マルクスの「本質の同等性」論の性格を——アリストテレスの「同等性」論とは違ったものとして——理解することができるであろう。

マルクスがアリストテレスにふれている部分をもう一度引用しておく。

彼は……この価値表現がひそんでいる価値関係はまた、家が寝台に質的に等置されることを条件とするということ、そして、これらの感覚的に違った諸物は、このような本質の同等性なしには、通約可能な大いさとして互いに関係することはできないであろう diese sinnlich verschiedenen Dinge ohne solche Wesensgleichheit nicht als kommensurable Größen aufeinander beziehbar wären とつうことを見ぬいている。彼は言う、「交換は同等性なしにはありえないが、同等性はまた通約可能性なしにはありえない」„Der Austausch“ sagt er, „kann nicht sein ohne die Gleichheit, die Gleichheit aber nicht ohne die Kommensurabilität“ („οἱτὶ ἰσότης μὴ ὁῶντος οὐκ ἔστιν ἰσότης“) と。(Ka. I. S. 73—74, 八〇頁)

この叙述で眼をひくのは、「同等性」と「通約可能性」との関係がマルクスとアリストテレスでは逆ではないかという点である。アリストテレスが「通約可能性」なしには「同等性」はありえないとしているのに対し、これを引用するマルクスは、アリストテレスが「同等性」なしには「通約可能性」はありえないことを見ぬいてい

る、としているのである。これはどのように考えたらよいのであろうか。この二つの論点の関連は、両者にとつて単に不可分ということではないはずである。とすれば、引用されている一節にマルクスの指摘する内容が含まれているか否かが問題になる。

マルクスはアリストテレスの用いる *isotēs* (isotes) という語に Gleichheit なる語をあてている。そして、マルクスの叙述からこの場合の Gleichheit が Wesensgleichheit と同義であるとすることができぬ。したがって、アリストテレスの *isotēs* なる語はマルクスによつて「本質の同等性 Wesensgleichheit」を意味するものとして引用されていることになる。アリストテレスの理論を原典に即して詳細に検討することは筆者の能力の及ぶところではないが、彼の *isotēs* 論の輪郭だけでもここで見ておく必要がある。マルクスによって引用されている一節は『ニコマコス倫理学』⁽¹⁶⁾の次のような叙述のなかにある。

……かような共同関係の生ずるのは二人の医者の間においてではなくして、医者と農夫との間においてであり、総じて異なつたひとびとの間においてであつて、均等なひとびとの間においてではない。かえつてこれらのひとびとは均等化されることを要するのである。交易さるべき事物がすべて何らかの仕方と比較可能的なことを要する所以はそこにある。こうした目的のために貨幣は発生したのであつて、それは或る意味においての仲介者（メソン＝中間者）*τὸς μέσος* となる。事実、貨幣は、あらゆるものを……計量する。それは、だから、幾足の靴が一軒の家屋に、ないしは一定量の食品に等しいかということ量を計量するのである。かくして、大工の靴工に対するごとくに、幾足かの靴が一軒の家屋に対していることを要する。でなければ交易も共同関係も

価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同等性」について

ありえないであろう。このことはしかるに物品が何らかの仕方において均等なものでないならば *ei mē iōa einētes* 不可能であろう。だからして、さきにいったごとく、あらゆるものが或る一つのものによって計量されることを要するのである。この一つのものとは、ほんとうは、あらゆるものの場合を包むところの需要 *χρεία* にほかならない。……しかるに、申しあわせに基づいて、貨幣が需要をいわば代弁する位置に立っている。(p. 283; 284, 上、一八七—一八八頁)

あらゆるものに価格を付しておくことの必要はそのゆえである。すなわち、そうすれば交易は常に可能となるのであり、しかるに交易あって共同関係はあるのである。かくして貨幣はいわば尺度として、すべてを通約的とすることによって均等化する *τὸ διὰ νόμισμα ὅσπερ μέτρον νομισμάτων ποιεῖται ἰσχύει*。事実、交易なくしては共同関係はないのであるが、交易は均等性なしには成立せず、均等性は通約性なしには存在しない *ὅστε γὰρ αὐτὴ μὴ ὁὄντως κοινωμία ἦν, ὅτ' ἀλλὰ τῇ ἰσότητι μὴ ὁὄντως, ὅτ' ἰσότης μὴ ὁὄντως νομισμάτων*。もとより、かくも著しい差異のあるいろいろのものが通約的となるということは、ほんとうは不可能なのであるが、需要ということへの関係から充分に可能となる。その際、すなわち、何らか単一なものの存在することを要するのであって、このものは協^{は協}定^定に基づく。ノミスマという名称のある所以である。このものがすなわちすべてを通約的たらしめる。あらゆるものが貨幣によって計量されるのである。Aは家屋、Bは一〇ムナ、Cは寝台。いま家が五ムナに値するならば、つまり五ムナと等しいならば、AはBの二分の一。また、寝台すなわちCはBの十分の一。この場合、幾台の寝台が一軒の家屋に等しい *ἴσον* かは明らかである。すなわち五台。(p. 286; 288, 上、一八九—一九〇頁)

2A=B, 10C=B であるならば $A \equiv^{1/5} C$ 。B に対する比率によって A の一定量と C の一定量とが「等しい」(*ἴσων*) とされる。A と C とは「共通の尺度 *κοινὸν μέτρον* たる貨幣」(p. 516, 下, 一〇九頁) によって測られ「比と比との間における均等性 *ἰσότης*」(p. 268, 上, 一八〇頁) が、すなわち「比例に即しての均等」(p. 274, 上, 一八二頁) が与えられる。交換される諸物が「何らかの仕方において均等 (同等) なもの」であるためにはそれらが「何らかの仕方と比較可能」でなければならず「或る一つのものによって計量され」なければならない。「仲介者 *μέσων*」たる貨幣が「尺度 *μέτρον*」としてこの役割を果す。貨幣がすべての物を比較可能にし「通約的なもの」とし、そうすることによってそれらを「均等化 (同等化)」するのである。この意味においてアリストテレスは「均等性 (同等性) は通約性 (通約可能性) なしには存在しない」というのである。ある

事柄を成立せしめる事柄 (成立の条件) を成立している事柄の下位に置くという仕方で図示すれば、アリストテレスの見解は上のようになる。「共同関係 *κοινωνία*」は「交換 *ἀλλογή*」なしにはありえず、「交換」は「均等性 (同等性) *ἰσότης*」なしにはありえず、「均等性 (同等性)」は「通約性 (通約可能性) *συμμετρία*」なしにはありえないが、貨幣によって諸物は「通約可能性」を与えられる。したがって、*συμμετρία* の根底に *ἰσότης* があるという構造ではない。

こうして、「通約的」となることによって与えられる「均等性 (同等性)」とは、同じ一つのものを介した比例関係であり、比率による均等化 (同等化) なのである。つまり、マルクスのいう「同質性 *Gleichheit*」——「本質の同等性 *Wesensgleichheit*」——ではなく、比例関係による「等置 *Gleichsetzung*」なのである。⁽¹⁷⁾

価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同等性」について

マルクスがアリストテレスの *ἐνότης* 論を以上のように自分に引き付けて読み込んでいるということは、次のことから確認することができる。すなわち、「かくも著しい差異のあるいろいろのものが通約可能になる *συνιέναι ὑπόθεσιν* ということは、ほんとうは不可能なのである」(p. 286, 一八九頁)というアリストテレスの一節を引用する際、マルクスは『通約可能になるということ』、すなわち、質的に等しい、*d. h. qualitativ gleich sein* ということ」(Ka. I. S. 74, 八〇頁——強調は引用者)と付け加えるのである。「通約可能性」の根底に「本質の同等性」があるというのはアリストテレスでなくマルクスである。つまり、マルクスにとっては「通約可能性」は「本質の同等性」なしにはありえないのであるから、このような換言も理にかなっているであろうが、マルクスと立場を異にすれば、妥当でないということになる。先にみたジンメルの見解も「すなわち」と換言できないことを力説したものであったということができる。

ところで、価値表現における「通約可能性」と「本質の同等性」とは、マルクスによって当初から以上のような関連のもとに把握されていたわけではない。『経済学批判』においてもマルクスはアリストテレスの同じ叙述を引用する。しかし、『資本論』における取り扱いとは異なっている。貨幣が諸商品を通約可能なものとするように見えるのは流通過程の外観にすぎないという一節に付した註のなかで、マルクスは次のようにいう。

アリストテレスは、たしかに商品の交換価値が商品価格の前提となっていることを見ぬいている。「……貨幣があるまゝに交換があったことは、明らかである。なぜならば、五台の寝台が一軒の家と交換されようと、また五台の寝台の値うちにあたる貨幣と交換されようと、すこしも区別はないからだ。」他方、商品は価格にお

いはじめて相互にたいする交換価値の形態をもつのであるから、彼は、商品は貨幣によって通約可能となると考えた。「すべてのものは価格をもたなければならない。……（省略——引用者）貨幣はものさしと同様に、実際にものを通約可能〔*vergleichbar*〕にし、ついそれらを互いに等置する。なぜなら、交換なしには社会はありえず、しかし同等性なしには交換はありえず、通約性なしには同等性はありえないからである。……彼の求めたものは、交換価値としての諸商品の統一性であるが、古代ギリシャ人である彼は、これを見いだすことができなかった。彼は、それ自体で通約できないもの *das an und für sich Inkommensurable* を、実践的な要求にとって必要なかぎりで貨幣によって通約できるものとすることによって、この困難からまぬかれた。「たしかに、このようにさまざまなものが通約できるということは、ほんとうはありえないことだが、けれども実践上の要求においてそれがおこなわれるのである。」（Kr. S. 52, 五〇—五一頁）

『経済学批判』におけるアリストテレス論は『資本論』におけるそれと次の諸点で異なる。第一に、「本質の同等性」なしには「通約可能な大いさとして互いに関係することはできない」ことを見ぬいているという指摘そのものがない。「一つの同等性関係」を発見したという指摘も、その「天才」を評価する言葉もない。第二に、先にみた「すなわち、質的に等しいということ」という一句は、この段階ではまだ挿入されていない。第三に、アリストテレスの叙述は、ここでは、マルクス自身の「本質の同等性」論を傍証するためのものとして用いられてはいない。第四に、結局のところ、マルクス自身に引き付けた読み込みがここにはまだ見られない、ということである。こうしたことが意味するのは、「価値形態」に関する研究の深化にともなって「本質の同等性」論が

価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同等性」について

マルクス自身のなかで明確な形をとるに至り、⁽¹⁸⁾それと同時にアリストテレスの *ideōtēs* 論の一節に新たな光があらわれることになったということである。

以上見てきたように、マルクスの「価値形態」論ではアリストテレスその人の *ideōtēs* 論がマルクス自身の *Wesensgleichheit* 論に即して焼き直されて論じられている。「価値形態」論のなかに「本質の同等性」論が根をおろしていく過程がすなわち、アリストテレスに対するマルクスの読み込みが進行していく過程なのである。

- (15) 等置される二商品のうちになんらかの「同等性」を見ようとするのはアリストテレス以来であると屢々指摘される。メンガーは「すでにアリストテレスが……この誤謬に陥つてゐる」(C. Menger, *Grundsätze*, S. 173, 一七三頁)という。マルクスにふれて M・ブロークは「諸商品が交換価値として互いに等置されるのは、それらがなにを共有しているからなのかを問うというアリストテレス的手法で in an Aristotelian fashion 問題にアプローチする」(M. Blaug, *Economic Theory in Retrospect*, Homewood, Illinois 1962: English edition, 1964, p. 248. 杉原四郎・宮崎厚一訳『経済理論の歴史』、東洋経済新報社、昭和四三年、第四刷、三四四頁)とし、シュンペーターはマルクスが「アリストテレスと同じような思想にとりつかれていた」(J. A. Schumpeter, *Ten great Economists from Marx to Keynes*, New York 1951, p. 27. 中山伊知郎・東畑精一監修、『大経済學者』、日本評論新社、昭和二十七年、四四頁)とする。アリストテレス以来の価値論の系譜におけるマルクスの位置については Odd Langholm, *Price and Value in the Aristotelian Tradition*, Bergen・Oslo・Tromsø 1979, が大いに参考になる。アリストテレスおよびスコラ学派の価値論に接する機会の少ないわが国では特に読まれるべき文献だと思われる。

(19) *Ἀποροταίης, Ἠθικά Nicomacheia*, In: Aristotle in twenty-three volumes, XLX, The Nicomachean Ethics,

with an English translation by H. Rackham, London 1926: 1975. 梶田三郎監訳『イリノイノキ倫理論』・下・岩波文庫、昭和四十六年——引用は第一二刷から。

- (17) *isōtēs* の英訳について。H. Rackham 監 (前掲校註) 'D. P. Chase 監 (London 1911: Everyman's Library)' W. D. Ross 監 (London 1915: 1975) 等は「*συμμετρίαις* なじみは *isōtēs* なじみ」ように譯せし *isōtēs* なじみは *equality* に譯しうる。しかし対し、最も新しい H. G. Apostle 監 (Dordrecht 1975: 1980) は *equalization* に譯出せしむる。前該個所の英訳を二種類、参考のため掲げよう。

Ross / Money, then, acting as a measure, makes goods commensurate and equates them; for neither would there have been association if there were not exchange, nor exchange if there were not equality, nor equality if there were not commensurability. (n. pag.)

Apostle / A coin, then, like a measure, by making goods measurable by the same unit, makes their equalization possible; for neither would an association of men be possible without exchange, nor exchange without equalization, nor equalization without measurement by the same unit. (p. 88)

※17' Apostle は *equality* なる訳語を用いる場合、ある箇所では “this equality [i.e., the exchange according to proportion]” (p. 88) なる説明を挿入し、また別の箇所では “The equality indicated here is an equality of ratios” (p. 262) なる註を付している。本文で見たとおり、通約性なことは「均等」(同等)——等置 *equalization*」でありえなくともうのがアリストテレスの含意である。

『資本論』の仏訳または英訳についてあるが、M. J. Rey 監 (Paris 1872—1875: rpt. Tokyo 1967) 'S. 価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同姓性」について

Moore & E. Aveling 訳 (London 1887: rpt. Moscow 1965) / E. & C. Paul 訳 (London 1928) / B. Fowks 訳 (Penguin Books, 1976) など、Rey 訳は l'égalité を「英訳は *equality* としてゐる。他方マンヌの solche Wesensgleichheit は *cette égalité d'essence* (Rey) ; such an equalization (Moore & Aveling) ; a common essence (E. & C. Paul) ; this essential identity (Fowks) としてゐる。 *íodrtys* は *equality* への solche Wesensgleichheit は such an equalization へ訳す Moore は Aveling の考えと全く逆なのが筆者の見解と違ふことになる。

わが国の『資本論』研究書においても屢々アリストテレスに言及されるが、宇野弘藏氏（前掲『経済学方法論』、一八七—一九一頁参照）、柄谷行人氏（前掲『貨幣の形而上学』、『現代思想』、第五卷第二二号、三五—四〇頁参照）等を別とすれば、マルクスの言葉がそのまま繰り返されるだけでアリストテレス自身の *íodrtys* 論が紹介されることはほとんどない。W. H. Emmett, *The Marxian Economic Handbook and Glossary*, New York 1925. も同様である。しかし普通は、つまりマルクスの眼を通して読むということをしなければ、アリストテレスの *íodrtys* 論はマルクスの解説とは違ったものとして解される。例えば、W. H. Emmett と同時代の著者 H. W. B. Joseph, *The Labour Theory of Value in Karl Marx*, London 1923. は *íodrtys* について「諸物に具体化されている「共通の要素」がそれらを通約可能にするのではなく「貨幣に対する共通の関係がそれらを通約可能にする」(p. 111) という見解」A. E. Monroe, *Monetary Theory before Adam Smith*, Gloucester, Mass. 1965. にみられる「ある共通の基準にもとづく比較によつて同等化されなければならない have to be equalized」(p. 9) という見解が一般的なのであろう。山本光雄『アリストテレス』(岩波新書、昭和四二年、一四八頁)、堀田彰『アリストテレス』(清水書院、昭和四三年、一六一頁)、ジャン・ブラン（有田潤訳）、『アリストテレス』(白水社、昭和三七年、一三四頁)、ジャン・ポール・デュモン（有田潤訳）、『ギリシャ哲学』(白水社、昭和三八

年「一〇四頁」J. A. Stewart, *Notes on the Nicomachean Ethics of Aristotle*, Oxford 1892; New York 1973, p. 470. 等々を参照。

なおアリストテレスの『形而上学』(Ἀποροσίτης, τὰ Μετὰ τὰ φυσικά, In: Aristotle in twenty-three volumes, XVII, The Metaphysics, X-XIV, with an English translation by H. Tredennick, London 1933: 1980, p. 260; 262. 出隆訳『形而上学』下、岩波文庫、昭和三十六年、第一七刷、二二四頁)における「尺度」論は内容的には「均等化(同等化)」論というより「同質性(同等性)」論であるといえる。

(18) 『経済学批判』にも「同等性」論はある。しかしそこで「本質的に等しく、ただ量的にだけ違う大いさとしての諸商品」(Kr. S. 30, 二九頁)とされているのは「等価物として他のどんな商品の一定量とでも任意に置き換わる」(ebenda, 二八頁)といふことか、いわれてゐるにすぎない。また「同等性 Gleichheit」(S. 19, 一七頁)といふ言葉がはじめて用いられるのも労働との関連においてであって、『資本論』の場合のように「通約可能性」とのかわりにおいてはではない。この点は次節でもふれる。

四 マルクスのベイリー批判

マルクスの「本質の同等性」論は、前節で見たとおり、アリストテレス以来動かしがたいものというわけではなかった。当のマルクス自身、「価値形態」論を構成する一論点としてそれを明確に位置づけるのは、『資本論』段階でのことである。そしてその方向はベイリー批判を契機に決定づけられたといえる。ここでは「本質の同等性」と「通約可能性」との関係という点に絞って、マルクスによるベイリー批判の骨子を見ておく。『リカード価値論の批判』⁽¹⁹⁾においてベイリーは以下のように論じていた。

価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同索性」について

Aの価値がBの価値に等しいという場合には「吾々はこれらの商品の他の諸商品に對する關係を、特に貨幣に對する關係を不可避的に絶えず顧慮してこの表現を用ひてゐる」(p. 9, 三—三三頁)のである。つまりそれは「AのCに對する比率がBのCに對する比率に等しいといふことを意味するにすぎない」(p. 9, 三三頁)。そして「價值の尺度」とはこの「比較の媒介物」たる「第三の一商品」(p. 98, 九九頁)を意味する。「AのCに對する比率がBのCに對する比率に等しい」とするベリーの論点は、まさにアリストテレスのいう「比と比との間における均等性」という論点にほかならない。また先に見たジンメルとの關係で興味深いのは次の一節である。

直接に比較することのできない二對象物の相互の關係を發見するのに必要缺くべからざる事柄は、ある第三の對象物に對するそれらのそれぞれの關係が分かつてゐるといふことである。(p. 107, 一〇五頁)

第三の對象物に對する二對象物の個々の關係は「共通の言葉または名稱 common term or denomination」(p. 104, 一〇四頁)にそれらの価値を表現させることによって示される。この意味において、このような比較に与つて必要なのは「共通の言葉が與へられてゐる」(p. 109, 一〇七頁)こと、「共通の名稱において表現される」(p. 110, 一〇八頁)ということである。

價值測定における必要な條件 the requisite condition は、測定さるべき諸商品が共通の名稱に還元される should be reduced to a common denomination といふことである。共通の名稱にはいつでも等しく

容易に還元されうるであろう、或はむしろ既に還元されてゐるのである、けだし共通の名稱とは記入されてゐる諸商品の價格、すなはち貨幣に對するそれらの價値の關係に外ならないからである。(G. 112, 一〇九頁)

ベイリーのいう「必要な條件」は貨幣によってすでに達成されている。「名稱」への還元という点を別とすれば基本的にはアリストテレスに即した見解といえる。マルクスも『経済学批判要綱』においてこの点を次のように述べていた。

商品をかように数量比例關係にもたらし通約しうるようにするためには、商品は同じ呼稱(單位) dieselbe Denomination (Einheit) を受けとらなければならない。(Gr. S. 61, 六四頁)

生産物が「一定の量的な關係に、ある關係数に」(S. 61—62, 六四頁)に轉化され、「同じ單位をもった名数 benannte Größen となり、したがって通約可能になる」(S. 62, 六五頁)。商品が労働時間という「ある他の要素」(ebenda, 六四頁)に轉化されるという点はベイリーと異なるが、「同じ名数(名稱を与えられた大いさ)」という点は、ベイリーの説くところである。しかし他方、次のような指摘も同時になされていた。

物の單に量的な區別はなにを前提しているか？ その質の同一性 die Dieselbigkeit ihrer Qualität である。(S. 90, 九三頁)

価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同等性」について

二つの物が同一の尺度でだけ通約可能であるのは、それらが同じ性質のもの、gleicher Naturである場合である。(S. 506, 五五六頁)

このように、「通約可能性」の条件としては一方に「同じ呼称 dieselbe Denomination」、「同じ単位をもった名数」という論点があり、他方に「質の同一性 die Dieselbigkeit ihrer Qualität」、「同じ性質のもの gleicher Natur」という論点があり、両者はいわば並存していた。しかし、後者、すなわち「商品がどのように同質であり一つのものである diese ihre Gleichheit, diese ihre Einheit」(S. 69, 七二頁)という論点が『剰余価値学説史』におけるベイリー批判を機に前面に押し出されることになり、同時に前者はその影を薄くしていく。⁽²⁰⁾

諸商品は同じ労働量をあらわすかぎりでは「同じもの gleich」であり、「同一のもの dasselbe」である(Mw. III, S. 124, 一六三頁)ということ、対象化された労働時間の定在としての諸商品の定在が「諸商品の単一性、諸商品の同一要素 ihre Einheit, ihr identisches Element」(Mw. III, S. 124—125, 一六四頁)をなすという論点は、特に新しいものではない。しかし、「量的区別」が「質の同一性」を前提するという論点は、ここではその質が何かという問題とは別に、ベイリー批判の立脚点として大きな意義をもつことになる。

彼は、マハンのリンネル＝メーヤーの救わら という場合、リンネルと麦わらという不等な物のあいだのこの同等性 diese Gleichheit が両方を等しい大いさにするという単純な反省さえも忘れていた。(S. 137, 一七九頁)

諸商品を一定の大きさとして比較するためには「前もって vorher」諸商品が「同名の大きさ、質的に同一のもの qualitativ identische でなければならぬ」(S. 125, 一六四頁)という論点は、何が「同等なものとしての定在」(S. 137, 一七九頁)なのか、何が「両方に共通なものは etwas beiden Gemeinsames」(ebenda, 同前)なのかという問題をそのものとしては含まない⁽²¹⁾。ベイリーがその問題に「答えていない」(ebenda, 同前)のは、「その同じ質 the same quality」(S. 160, 二一九頁)を見出すのが「困難」(ebenda, 同前)だからではなく、「質的同一性」が不等な物を等しい大きにするという点に眼を向けないからだ、マルクスはこうベイリーを批判するのである。

これを別の角度から見よう。「AとBとに共通な一つのものがある there exists a common unity for A and B」(S. 159, 二〇八頁)ということ、したがって x 個の商品 $A = y$ オンスの金 という場合にもAと金とのあいだに「共通な一つのもの」がある。AとBとの比較においてAおよびBが同じ単位で表現されるということではなく、AおよびBが「同じ一つのものを、*dieselbe Einheit*」(S. 141, 一八五頁)表現しているところ、マルクスによるベイリー批判の核心がある。「何によってこの表現(貨幣表現——引用者)が可能になるのか、どのようにそれが規定されるのか、また、それは実際には何を表現するのか *was er in der Tat ausdrückt*」(p. 155, 二〇一頁)をベイリーは理解しようとしないとマルクスは批判する⁽²²⁾。貨幣表現が、したがって価値表現が「実際には何を表現しているのか」と問われれば、ベイリーはあらためて「価値といふ特殊の感情」(p. 2, 二八頁)、「意思の決定に表はれる感情または心理状態」(p. 180, 一六一頁)について論じるかもしれない⁽²³⁾。しかしその場合、やはり、「同じ一つのもの」が表現されるという方向には展開されないのである。等式を「同じ一つの

価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同等性」について

の」で表現されているものとして考察するか、あるいはそれとは別の問題として「同じ一つのもの」が表現されているものとして考察するかが、アリストテレス・ベイリー・ジンメルとマルクスを分つところであろう。

ところでこの「同等性」がマルクスによって「前提」された、もしくは「設定」されたとするのは正確でない。違った種類の使用価値が等置されているということは「同等、質的に、一様であって、ただ、この質的に同等なものの量的表現だけが相違する」ということが「すでに基底にある ist schon unterstellt」(S. 132, 一七三頁)のであって、諸商品は価値として「すでに同一 schon identisch」(ebenda, 同前)なのである。一商品の価値を金で表現するという問題には――

問題そのもののなかにすでにこのような前提が存在している im Problem selbst liegt schon diese Voraussetzung のひめである。(S. 132, 一七三頁)

AをBのどれだけの部分と等置することは、AとBとに共通な一つのものが存在する「場合のみ可能 this is only possible if…」(S. 159, 二〇八頁)である。AのBでの表現が「なにによって……可能なのか wordlich…möglich wird」(S. 155, 二〇一頁)、「^{ウンターシュテレン}しかたに可能なのか how it is possible」(S. 147, 一九三頁)――この間に答えるものとしてマルクスは「同等性」を「基底とする」という論点を対置するのである。⁽²⁴⁾

ベイリー批判を通してマルクスのなかで明確な形をとっていったのは、等式それ自身が含みもつ「前提」としての――等式の「基底をなす」ものとしての――「同等性」という論点であった。『資本論』「初版」の「価値

形態」論では、20頁の上着と下着の等式におけるリンネルが上着と「同じ本質のもの gleicher Wesens」(『初版』Ka. I. S. 18, 四八頁)とされている。そして「初版」・「付録」では、「同じ性質のもの、同じ実体のもの gleicher Natur, gleicher Substanz」(S. 766, 一三三頁)とされているが、20頁の上着と下着の等式における「基礎 Basis」(ebenda, 同前)であるとされる。「第二版」したがって「現行版」では Basis にかわって Grundlage が用いられるが、基本的な変更はない。このように、「価値形態」論完成の最終段階に等式の「基礎」としての「同等性」という論点が登場するのである。

こうして、マルクスによるベイリー批判の過程は、等式の「基礎」としての「同等性」という論点、すなわち、「本質の同等性」なしには「通約可能性」はありえないという論点が「価値形態」論のなかに根をおろしていく過程なのである。

- (3) Samuel Bailey, *A Critical Dissertation on the Nature, Measure and Causes of Value*, London 1825: rpt. New York 1967. 鈴木鴻一郎譯『リカード価値論の批判』日本評論社、昭和十六年——引用は世界古典文庫、昭和二年から。

- (2) 「通約可能性」という論点をP、「本質の同等性」という論点Qとすれば——PとQが単に並存しているにすぎない立場に対しては、Qのみの否定が一つの批判的立場たりうる。しかし、QによってのみPが可能であるという仕方では両者が一つの論点を構成している場合、Pを否定せずQのみを否定しても批判的立場たりえない。その場合はPとQの関連を切断してみせる必要がある、その一つの方向を示したのがジンメルであった。マルクスの場合、ベイリー批判を通してP・Q両者の関連が整理されていくわけだが、その際「同じ名称」という論点は「通約可能性」という論点に重ねられて同一の論点をなすものとして扱われることになる。「ただ同じ」^{Einheit}のものの諸表現と価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同等性」について

してのみ、これらの物の大いさは、同名の、したがって通約可能な大いさなのである」(Ka. I. S. 64, 六七頁)という場合も、「同名の」ということと「通約可能な」ということはほとんど同一次元の問題とされている。「本質の同等性」なしには「同一名称性 \parallel 通約可能性」はありえないというのが力点である。

- (21) 「交換において示される等一物が何であるかを知ることと、等一物の存在の必然性とはある程度獨立に明らかにされる必要があるのではないか? 古典學派は第一の問題をどうにか解決しえた。しかし彼等は第二の問題について知るところがなく、その解決をマルクスに委ねた。結局第二の問題は価値形態の問題につながるのである。」(遊部久藏、『価値論争史』、青木書店、昭和二十四年、七八頁)

- (22) マルクスとベイリーの關係を論じたものとしては玉野井芳郎氏の一連の論稿(玉野井芳郎、『經濟理論史』、東京大學出版會、昭和五二年、所収)が興味深い。しかし、等式が同じ一つのことを「表現している」とするマルクスを「価値形態とはおよそ縁遠い理解」(二五三頁)だとして批難するのは妥当でない。マルクスがベイリーに問ひ質していたのは、「Aといふ對象物の價值はBといふある他の對象物の數量によつてのみ表現され得る」(Bailey, p. 27, 四五頁)というその等式はどのようにして可能か、「なにを表現しているのか」という点である。同じ「表現する」という言葉であっても、商品Aの價值が商品Bの使用價值によつて「表現される」という場合のそれとは、その意味するところ、問題にされている事柄が全く異なる。「価値としては、上着とリンネルとは、同じ実体をもった物であり、同種の労働の客体的表現 objektive Ausdrücke」(Ka. I. S. 58, 五九頁)とマルクスが第一章第二節でいうとき、玉野井氏にしたがえばここでも「二つの規定が当時のマルクスにおいてはなお未分離のままにあった」(二四九頁)といわなければならないことになる。氏の所説はきわめて重要な論題を多く含んでいるため慎重に検討する必要がある。しかしそれには榎原均氏が『資本論』の復権——宇野經濟學批判』(鹿野社、昭和五三年)のなかでおこなっているように、玉野井氏の用語法の整理から始めなければならない。氏の見解を中心に取

り扱ったものは別の機会にまとめることにする。榎原氏の玉野井氏に対する批判についてもその折あわせて検討する。

(23)

ベイリー価値論を総括的に評価するためには欠かせない論点であるが、ここでふれる余裕はない。ベイリーの『リカード価値論の批判』は「経済學の現状においては、先行及び當代の經濟學者達の諸學說に對する批判的關説はこれを避けることができないし、またたとへ避けることができたとしても避けるべきではない」(Bailey, XI, 一七頁)という意味において「經濟學批判」なのであるから、その「心理學的素養」(R. M. Raumer, *Samuel Bailey and the Classical Theory of Value*, London 1961, p. 26. 参照)も含めた包括的な研究が俟たれるところである。

(24)

この「いかにして可能なのか」という問について廣松渉氏は「決して単なる『歴史的成立機構』に関わる *quid facti* ではなく、『可能性の制約』(*Bedingung der Möglichkeit*)の問求であり、存立機制の究明である」(廣松渉、「貨幣論のためのフレイユード」『現代思想』、青土社、第五卷第一一号、一四六頁)としている。「現相的に与えられた事象の可能性の制約を問求することにおいて、關係態の項を定礎する」(同、一五四頁)という氏の方法については次回ふれたい。

(25)

マルクスは *voraussetzen* および *unterstellen* という語を次のように用いる。一方では「ごく普通の意味で、ここでは……を前提する」、……がここの議論の前提である、というように。この場合は「方法的に必要なことである」(Ms. I, S. 61, 一〇八頁)ため、「關係を純粹に理解するため」(Ka. I, S. 188, 二二八頁)、「理論的簡單化と……」(Ka. III, S. 184, 第一分冊、二二二頁)等——*wir, er, man* すなわち考察者(分析者)がそうする。他方の「前提」は「本質的な条件と……」(Ka. III, S. 89, 同、一〇〇頁)の前提であり、「基礎および条件 *die Grundlage und Bedingung*」(Mw. I, S. 365, 四九五頁)という意味である。この場合は「この前提条件が価値形態論における『本質の同等性』について

価値形態論における「本質の同等性」について

なければ without that premise それらの存在そのもの the very existence が無意味な不合理なものになってしまふ」(Mw. III. S. 78, 一〇一頁)のひるがらぬに「問題そのもののなかにすでに存在している」前提である。その意味では「根底にある事実 der Tatbestand, der... zugrunde liegt」(Ka. II. S. 38, 四五頁)「基礎——すなわちその定在の現実の条件 die Basis...——d. h. die reelle Bedingung für ihr Dasein」(Mw. III. S. 442, 五八三頁)である。

ハイリー批判の際にマルクスが用いる unterstellen は、主として後者である。廣松渉氏は『経済学批判要綱』の「Der Tauschwert unterstellt die gesellschaftlich Arbeit als die Substanz aller Produkt...」(Gr. S. 119)とつづ一節の unterstellen を「実体的基礎に unterstellen しよう」と訳出じ、『仮定する』とか『前提する』とかいう訳語では、インマルト流の解釈に通じかねないので、敢えてこう訳した」と付け加えている(廣松渉『資本論の哲学』、現代評論社、昭和四九年、六一頁)。筆者も廣松氏と同様の危惧をもつ。特にハイリー批判の際に繰り返し用いられる unterstellen が何を意味するかということはマルクスの方法の根本にかかわる問題である。適切な訳語を今後も模索する必要がある。G. Wahrig, *Deutsches Wörterbuch*, Gütersloh・Berlin・München・Wien 1968: 1974. びず voraussetzen を „als gegeben annehmen“ と unterstellen を „als wahr annehmen“ と説明している。マルクスが両者をこのように何らかの仕方で常に区別して用いていたかといえはそうではない。「仮定する」『前提する』『想定する』等の意味で unterstellen が使われている例は多い。次の箇所を参照——Kr. S. 59, 67, 146, 155; Mw. III. S. 155; Ka. I. S. 542; Ka. II. S. 327; Ka. III. S. 370; Ms. I. S. 228, usw. やはり「同じ術語 derselben termini technici を違った意味で使用することは不都合であるが、どんな科学の場合ににも完全には避けられない」(Ka. I. S. 231, 二八二頁)とつづことであらう。

五 むすびにかえて

二商品間にいかなる意味の「等置」も「同等化（均等化）」も認めない立場からすれば、アリストテレスもマルクスも同じ穴の貉ということになる。マルクスを批判する立場からすれば、現代科学に何ら貢献するところのない遠い過去の遺物にしがみついているという意味において、マルクスは「アリストテレス的」となる。マルクスを支持する立場からすれば、哲学の古典を掲げることとその学説の由緒正しさが示されることになる。しかし、「本質の同等性」と「通約可能性」に関しては、マルクスはアリストテレスの直系とはいえない。むしろ、ベイリー、ジンメルがアリストテレスと同一の系譜に属し、マルクスはおそらくヘーゲルとのかかわりのため、アリストテレス以来の本流には属さないことになる。本流では等式の外部に別の等式が置かれることによってはじめ——同じ一つのもので、表現されるという観点から——考察が始まるのに対し、傍流では一つの等式の内部でその根底にあるものを——同じ一つのものが、表現されるという観点から——考察する。そして、後者は、その同じ一つのものが本当は何なのかという問題とは別に、等式の「基礎」という論点に到達する。

「初版」・「付録」の「価値形態」論にこの論点が登場したのときを同じくし、かのアリストテレス論が登場する。つまり、「本質の同等性」なしには「通約可能性」はありえないという論点が確固たるものとなることによって、同時にアリストテレスの *ideology* 論があらためてクロース・アップされる。そして、それが「本質の同等性」論に即して読み込まれ高く評価されることになるのである。したがって、マルクスの対アリストテレス評価の変化は、マルクス自身の理論形成に対応しているのである。「価値形態」論が最終的な形に近づく過程で「本

価値形態論における「本質の同等性」について

価値形態論における「本質の同等性」について

質の同等性」論はその構成要素としての明確な位置を与えられることになる。等式・通約性・同等性という関連が「価値形態」論の一論点を形成することによって、「労働」については直接論じられていないアリストテレスの *Politics* 論が「価値形態」分析の嚆矢として評価されるのである。

マルクスの「本質の同等性」論がほかならぬ「価値形態」論のなかにあるということ、そして等式の「基礎」という仕方でその出発点としての位置を与えられていることが確認されれば、次に考察すべきは、それがどのように他の諸論点とかかわっていくのかという点である。「価値物」・「価値体」規定の考察にあたって「同等性」論を出発点に据えるとなれば、当然、「同等性（同質性）」といわゆる「対極性」（「異質性」）との関連が問題になる。これについては以前から様々の指摘がなされてきたが、「価値物」・「価値体」の区別に即した考察はようやく始まったばかりであるといえよう。両規定の関連を見極める作業に取りかからなければならない。